

## 2023 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

|               |     |         |
|---------------|-----|---------|
| 所属学部 学科       | 職位  | 氏 名     |
| 教育学部 子ども発達学科  | 教授  | 山本 かほる  |
| 最終学歴          | 学 位 | 専門分野    |
| 愛知教育大学 教育学部卒業 | 学士  | 国語 教師教育 |

### I 教育活動

#### ○理念・目標・方針・計画（方法）

**【理念】理論と実践の両面、両者の有機的な結びつきを意識して教育活動を行う。**

実務家教員の役割として、学校現場での経験に基づいた実践例を学生に伝えることが期待されていることを意識して日々の教育活動にあたっている。しかし、それらが単なる自分の経験談なら学ばせる価値はない。一つ一つの経験談や実践例に、理論的な裏付けがあるかどうか、一般化できる内容なのかどうかを検証した上で伝えていきたい。

**【目標】「天に事うる職分」としての教職のやりがいを伝え、教職へのモチベーションを向上させる。**

1年生と話していると、誰もが「小学校の時の〇〇先生みたいに、いい先生になりたい」「子どもの成長に関わる仕事がしたい」・・・という純粋な気持ちや夢をもって本学教育学部に入学してきたことが分かる。しかし、昨今の「ブラック職場」「長時間労働」などの報道に接して自信を失い、途中で志を折ってしまう学生が少なくない。特に教育実習の前にはどの学生も大きな不安を訴え、精神的に不安定になってあわや「実習取り下げか」と危惧される学生もいる。

そこで、多忙ではあるが多くの教員がやりがいと喜びをもって子どものために尽力している教育現場の現状を正しく理解させるとともに、学生が教育実習や教員採用試験に自信をもって臨めるように、基礎的な知見と実践力をしっかりと身に付けさせて送り出したい。そのために、教育実習事前事後指導や教職実践演習、教職特講・教職セミナー、教職概論の授業をさらに充実させるべく、授業の計画や内容、教材資料を工夫・改善していく。

**【方針】対話的な学びなど、アクティブラーニングを意識した授業手法を取り入れる**

学生が教員になった時に、従来の画一的な一斉授業ではなく、アクティブで個別最適な学びを実現するような授業を実践してほしい。そのために、その参考になるような授業を自ら実践して、どんな学びがアクティブなのか、個別最適なのかを体験的に学ばせたい。

また、教科教育法や教育実習事前指導・教職実践演習の授業では、学生に実際に教壇に立たせて模擬授業を行い、子どもたちの目線に立った授業を創り上げる、教師の本懐とも言うべきクリエイティブな喜びを味わわせ、モチベーションにつなげたい。

**【計画（方法）】教職のやりがい・喜びを伝え、今の教育現場の実情に応じた、実践的な力を身に付けさせる。**

- ・ 教育実習事前事後指導（前期）・教職実践演習（後期）

教育実習事前指導では、実習生といえども、建学の精神「真に信頼して事を任せうる人格の育成」にあるように、一人の「教師」として責任ある言動を心がけるよう、過去の事例も紹介しながら具体的に指導する。しかし一方で、子どもと接する楽しさ、授業を工夫するクリエイティブな面白さも伝え、実習が楽しみになるようなポジティブな気持ちで実習に臨ませる。

学生が最も不安を訴えるのは研究授業なので、1対1の個別指導で授業のねらいを明確にした指導案作成についてとことん指導する。そして完成した指導案をもとに、実際の教室を模した形で全員に模擬授業を体験させ、少しでも現場に近い形で授業力を磨き、不安を取り除いて現場に送り出したい。また、全員を対象として実習の前後に個別面談を行い、実習への不安解消や有効な振り返りを目指す。さらに事後指導の最後に開催する成果発表会は学生の自主運営に委ね、実習での自己の成長を実感させる場としたい。

教育実習や教員採用試験・院進学準備及び事務手続きについては「事前事後指導の手引き」に一括掲載し、ワンストップで一貫して指導するものとする。

また後期の教職実践演習では、4年間の教職課程での学びの総仕上げとして、履修カルテを完成させて振り返りをしっかりと行わせる。また、指導案作成・模擬授業を再び実践させ、事前検討・事後検討を通して教育実習前の自分と比較することで、各々の自らの成長と課題を実感させたい。

- ・ 教職特講（面接・論文講座 前後期） 教職セミナー（後期）

教職特講では、2次の論文・面接対策を担当している。昨年度作成した「面接・論文の教科書」を今年度も活用し、繰り返し学べるようにしたい。また、論文・面接対策の基礎として必要な、教職教養の知識や現代的な教育課題についての知見を身に付けるための資料については、最新の教育課題を盛り込んでアップデートするものの分量はできるだけコンパクトにし、ポイントを繰り返し学んで着実に身に付くようにしたい。受講生一人一人が受験する自治体ごとに過去問をまとめた資料も作成・配付し、学習が効率的にできるようにしていきたい。

また、初等教職課程3年生全員を対象とした教職セミナーを2月に予定している。特講生以外の学生にとっては、教採について学び、面接などを実体験する貴重な機会となるため、配付資料や外部講師の一層の充実を図りたい。

- ・ 教職概論（後期）

一昨年度から幼・小の2講座に分けたことにより、小学校教諭に特化した具体的な学びが可能になったことは特筆に値する。教職に関する歴史や理論・用語を、今まさに小学校の現場で起こっていることと結びつけ、「自分がもし担任だったら・・・」と、自分ごととして考えさせながら理解させる。また、若手教員の生の声を紹介してそれについて考察・発表させたり、「教育に正解はない」ことを実感させつつ討論などの対話的な学習を取り入れて、アクティブな学びをめざしたい。幼・小を分ける形式になってから、授業評価アンケートにおいて、授業前と後と比較すると、「教職へのモチベーション数値」が毎回全員伸びていることも付言しておく。

## ○担当科目（前期・後期）

（前期）

サービス・ラーニング実習Ⅰ、基礎演習Ⅰ、教育実習Ⅱ（小学校）、教育実習事前及び事後の指導（小学校）、国語

（後期）

サービス・ラーニング実習Ⅱ、基礎演習Ⅱ、教職概論（幼・小）、教職実践演習（幼・小）、国語科教育法

## ○教育方法の実践

・「教育実習事前事後指導」（前期）においては、教科書となる「教育実習Ⅱ事前事後指導の手引き」に毎年改良を加えている。例年実施される名古屋市・愛知県教育委員会の実習打ち合わせ会で教委から出された反省事項や実習校からのお声をもとに実習に向けた心構えの内容についてアップデートする他、教育時事なども取り入れ、最新の情報を伝えるようにした。また、指導案作成は1対1で、個別対面で実習生と対話しながら十分に時間をかけて指導し、模擬授業実践にも時間をかけた。さらに外部講師を招聘し、ロイロノートの使い方の講習も行った。なお、学生が最も緊張する実習校との関わりや煩雑な書類作成についてもマニュアル化し、1冊の手引きで実習に必要な実務と学習が全て網羅されるよう工夫している。

「小学校教育実習実施要項」についても、教委や実習校からの「働き方改革」に対応した実習内容に、という要望に沿って改訂を加えるとともに、本学の「実習における感染症対策ガイドライン」を掲載し、実習校の理解と協力が得られるよう努力した。

教育実習開始前と終了後には、実習生との個別面談を行った。どの実習生も不安を訴えるので、丁寧に不安や疑問に答え、自信をもって実習に臨めるようにした。一昨年まで連続2年間、実習不合格者が1名ずつ出ていたが、今年度は全員合格し、実習参加者全員に免許を取得させることができた。

・ 前期「教職特講」においては、特講生のべ16名が7自治体に合格することができた。また、3名が大学院進学という結果となり、どの学生も希望を叶えることができた。自治体別に作成した過去問集、教育時事を分析して作成した対策資料や、2次の面接対策をマンツーマンで一人あたり6時間以上集中して行ったことが奏功した。

後期「教職特講」においては、来年度に教員採用試験を受験する3年生を対象に、まず基本的な教職教養の知識や、現代的な教育課題についての考え方、面接・論文の基礎的なスキルを学ぶことからスタートした。スタート当初は、基礎的な学力、特に国語力の差が目立ったが、年度末に近づき知識やスキルが身についてくると、どの学生も自信をもって演習に臨めるようになってきた。

- ・ 後期「教職概論」においては、担当する初等コースの授業で小学校現場の話を中心に、学生の関心が高いいじめ・不登校・モンスターペアレントの対応、ICT活用教育等現代的な教育課題と、それらの背景にある社会情勢について意見を表出させながら考えさせた。また、昨今教職志望者減少の元凶となっている「学校＝ブラック職場」とする言説について、歴史的な経緯や現状について学ばせ、考えさせた。

教材としては、文部科学省や関係機関から発表された最新データ及び教育問題についての報道を踏まえつつ、現場のリアルな話や悩める教師の生の姿を取り上げたパワーポイントや動画教材を作成した。

本授業は今年度授業評価アンケートの対象となった。「この授業によって学ぶことへの興味関心が高まったか」4.7、「この授業では学生が理解しやすいような工夫がなされていたか」4.8などで、一番低い項目「到達目標を達成するために適切な授業設計がなされていたか」でも4.3と概ね高評価を得られたととらえている。

- ・ 「基礎演習Ⅰ」（前期１年生ゼミ）においては、他のゼミ担当教員と協力し、三輪丈太郎氏による絵本についての講演の後、自分が選んだ絵本のプレゼンをさせたり、「大人ってどういう人？」というテーマでワールドカフェ形式の話し合いをしたりなどのアクティブラーニングを試みた。学生による意欲の差はあったものの、座学では見られないいきいきとした様子が見られ、ますますの成功だったととらえている。

「基礎演習Ⅱ」（後期１年生ゼミ）においては、学園祭の「キッズ広場」の取組みが主となった。リーダー的な素質のある学生も敢えて目立つことを避ける傾向があり、一時はなかなか活動が進まない場面もあったが、自主的に調べたり自宅で用具を自作してきたりなど、積極的に活動できる学生もあり、当日は地域の子どもたちを迎えて楽しいイベントとなった。

ただ、修学意欲の低下による退学者２名を出してしまったことは痛恨の極みである。個別面談を何度か行い、悩みなどの相談にのったり欠席しないよう励ましたりし続けたものの、欠席回数が減らず、保証人も交えて何度も面談し休・退学を検討した結果、退学という結論となった。来年度に向けた課題としていきたい。なお、この２名とは別に、他大学への転学による退学者も１名出た。この退学は、学生自身の夢を叶えるための前向きの退学ではあるが、合計３名の退学者が出たことはゼミ担当として重く受け止めている。

- ・ 前期「国語」の授業では、教師としての基礎的な国語力を培うという観点から、文法・語彙・漢字やコロケーション、話し言葉と書き言葉の区別、敬語、悪文と良文などの言語事項の知識・技能修得を中心とする内容を取り入れた。また、学習指導要領の内容や読みとり方も学ばせた。しかし、これらの知識・技能修得型の授業は１５回のうち４回にとどめ、残りは体験型の学びや、グループワークやペアによる対話的な学びを取り入れた。

体験型の学びとしては、まず、「対話的な学び」が推奨されて以来多くなった「話し合い」を扱った。「話し合う」とは具体的にどうすることなのか、どうしたら「話し合えた」ことになるのかを、実際にグループでの話し合いを体験させて考えさせ、学習の「目的によって話し合いのさせ方が異なることを実感させた。また、「読解する」とはどういうことかを体験するために、実際に小学生になったつもりで様々な種類の読解問題を解いてみたり、読解のための発問を考えさせたりし、それをもとにミニ模擬授業を体験させた。さらに教師として漢字テストを作成・採点して、どのような評価基準及び評価規準で採点したかを比べ合わせ、文化庁の漢字についての指針を紹介しつつ、評価するとはどういうことなのかを考えさせた。

また、後期「国語科教育法」における、指導案作成の準備段階としての、授業構想の立案も試みた。４教材について立案させたが、前期に学習指導要領や教材文を読み込んで構想を立てておくことにより、後述のように、後期「国語科教育法」における指導案立案や模擬授業の事後検討で、グループで話し合う時間が十分に確保できた。

本授業は学生による授業評価アンケートの対象外となったが、自主的に実施したアンケートの結果は次頁の通りである。なお、数値による評価は４段階評価である。

## 2023前期国語 授業評価アンケート結果（4点満点）

### 1 この授業を受講して、自分の国語力についてどんな学びがありましたか。

- (1) 「ことばコラム」などで、日常生活の中のことばへの関心が、以前より高まった。【3 . 2】
- (2) 「悪文をやっつけよう」などの言語事項の学習で、自分の国語力を見直すことができた。【3 . 6】

### 2 この授業を受講して、「国語」という教科についてどんな学びがありましたか。

- (1) 学習指導要領を読んだり、教師の解説を聞いたり、授業構想を作成したりすることで「国語」とは何を学ぶ教科なのか理解できた。【3 . 5】
- (2) 実際に読解問題を解いてみたり（3種の読解力）、グループで話し合ってみたり（おススメのペット）して、読みとることとはどんなことか、話し合うこととはどんなことか、について考えることができた。【3 . 4】
- (3) 授業構想の作成は難しかった。【3 . 0】
- (4) 授業構想の作成を通して、「本時のねらい」を明確にしてぶれないことの大切さが理解できた。  
【3 . 8】
- (5) 授業構想の作成を通して、教師として国語の授業を実際にどのように進めるかをイメージできた。【3 . 2】

### 3 授業の進め方はどうだったでしょうか。後期の「国語科教育法」の進め方の参考にするために、聞かせてください。（一部抜粋）

#### (1) 良かった点

みんなの意見を比較しながらの解説がわかりやすかった。

授業構想の振り返りで、授業で何を意識すればいいのかが分かった。

授業構想を作ることで、授業のねらいの大切さや、授業の難しさがよく分かった。

提出した授業構想に先生のコメントがたくさん書かれて返ってくるので、次回しっかり改善できた。

どんな授業構想も否定せずに、解説してくれた。

#### (2) 改善を要する点

授業構想を作るのが難しく、授業時間内で終わらなかったのもっと時間がほしかった。

たまに説明が速くて、メモできないことがあった。

もっと授業構想をたくさん作ってみたかった。

・後期「国語科教育法」においては、例年教育実習事前指導で指導案を作成させる際、基本的な知見が身につけていない学生が多いことを踏まえ、指導案についての基本的な知識をしっかりと身に付けさせるために、国語科の教材研究とは具体的に何をどうすることかを学んだ後、指導案各項目の意義や用語解説に3コマを費やし、さらに「指導案の間違い探し」を行い、学生が陥りがちな指導案作成の勘違いやミスについて押さえ、知識・技能面での万全を期してから指導案作成・模擬授業に臨んだ。その結果、指導案の添削指導の際には、用語の誤りなどの基礎的なミスが減り、内容面の指導に注力することができた。

模擬授業は14名全員が授業者として授業ができるよう、昨年度同様3～4人グループで、1人ずつ授業者、残りは子ども役という形で4教材4回の実践とした。指導案作成前の共同教材研究と模擬授業後の事後検討会もこのグループで実施させた。授業者以外にも全員指導案を作成した上で話し合いに参加させるとともに、全員が必ず発言しながら課題を解決するという話し合い方をマニュアル化し、記録させたので、各グループとも非常に活発な話し合いができていた。このマニュアル・記録により、「何が分かったら話し合えたことになるのか」という対話のゴールがはっきりしたことで学んだ事柄が明確になり、それらを指導案作成や教材研究に直接生かすことができていた。

模擬授業の際は、「起立・礼」に始まり、できるだけ本物の授業に近い分式で行うようにした。各グループごとに机に立てた大型ホワイトボードを黒板に見立て、授業者になった学生は自作のフラッシュカードや挿絵・写真を掲示したり板書したりしつつ、本物さながらの授業を行うことができた。フラッシュカードやワークシートを工夫して作成してくる学生も、回を追うごとに増えていった。授業者以外の学生にも毎時課題として全員に指導案を作成させたので、模擬授業で学んだことが活かされ、毎回内容が向上していった。子ども役の学生は子どもになりきり、しばしば笑い声も響く楽しい雰囲気だった。

全員が授業者・子ども役を体験したことで、「国語科における主体的・対話的で深い学びとはどんな学びか」をより実感的に理解するきっかけとなったと考えている。中でも、模擬授業に児童の立場で参加したことで、一方的な教え込み型の授業ではなく、「引き出す」学びへの変換が大切であることを、子どもの気持ちになって理解できたことは大きい。

来年度は受講者減も見込まれるので、グループ別ではなく、全体での模擬授業の実践を検討している。ただ、その場合、全員が授業者になると1回の模擬授業が15分～20分になってしまうため、導入⇒展開⇒まとめのいずれかの1段階を見せることしかできなくなる。グループ別か全体授業か、検討を続けていきたい。

最終回の授業では、昨年度から外部講師による国語科のデジタル教材の体験授業を実施している。教科書会社の協力により、1週間一定期間デジタル教科書のアクセスが無料できるようになり、デジタル教材の実物を自分のPCで操作することができた。操作するだけでなく、このデジタル教科書を活用してどんな国語の授業をしてみたいかを考え、提案させることもできた。来年度も引き続き実施したいと考えている。

なお、前期「国語」と同様、自主的に授業評価アンケートを実施した。その結果は次頁の通りである。

## 2023 後期国語科教育法 授業評価アンケート結果（4 点満点）

### 1 国語科の指導案について学び、実際に作成してみて、どうでしたか。

- (1) なぜ指導案を作成するのか、指導案作成の必要性が理解できた。 3 . 9
- (2) 指導案の各項目の意義や作成上の注意点が理解できた。 3 . 4
- (3) 指導案の作成の仕方が理解できた。 3 . 9
- (4) 返却された指導案に書かれたコメントは参考になった。 3 . 8
- (5) 前期「国語」で授業構想を立てた経験が、指導案作成に役立った。 3 . 8
- (6) 学習指導要領の内容が、単元の目標や本時の目標に直結していることが理解できた。 3 . 6
- (7) 配付された指導案の見本は、指導案作成に役立った。 3 . 8

### 2 指導案作成や模擬授業を体験してみて、どうでしたか。（記述の一部）

- (1) 模擬授業を体験した感想（先生役として、児童役として）

児童の反応が予想外で、授業の難しさを改めて感じた。誘導にならないように発問することが特に難しかった。一番大切なのは、児童が楽しく主体的に授業を受け、授業の目標を達成することです。

児童役としては、「2 年生だったら？」と考えるのが難しかったが、勉強になった。

- (2) 模擬授業後のグループ討議の感想

グループの話し合いで、自分では気づかないことがたくさん分かった。

指摘されたところを次回に改善することができて、役だった。

### 3 授業の進め方はどうだったでしょうか。今後の「国語科教育法」の進め方の参考にするために、聞かせてください。（一部抜粋）

- (1) 良かった点

指導案作成と模擬授業を交互に行ったので、メリハリがついてやりやすかった。

模擬授業の後、振り返りの時間があつたので、授業の反省を踏まえて次の指導案作成ができた。

- (2) 改善を要する点

模擬授業の事後検討の時間をもっと確保してほしいかった。

スライドの進め方が速く、消化しきれない時があつた。

○作成した教科書・教材（改訂も含む）

基礎演習Ⅰ

パワーポイント教材「メール・TOPOS TEAMS を使いこなそう」

国語

パワーポイント教材「国語」

身近な言葉について話し合おう（コラム教材）

「大丈夫ですってほんとに大丈夫？」～若者ことば「大丈夫です」

「揚げ出し豆腐に変身？」～マニュアルことば「～になります」

「チワワの店員？」～主語と述語「ペットショップでチワワが売ってる」

『お疲れさま』って言ったら怒られた？」

国語科教育法

パワーポイント教材「国語科教育法」

学習資料

「国語科指導案作成例集」A細案編 B略案編

「国語科指導案 間違い探しワークシート」

「模擬授業事前・事後検討会 グループマニュアル」など

教職概論

パワーポイント教材「教職概論」

学習資料・ワークシート

「学校現場に影響をもたらした社会のできごと」

教育実習事前事後指導

学習資料「教育実習 事前事後指導の手引き」全60ページ

「学校ってどんなところ？」

「子どもとどう向き合うか」

「示範授業のどこをどう見るか」

「実録！ 教育実習事件簿」 等

「指導案例集（新学習指導要領対応）」（名古屋版）（愛知県版）

「教育実習ノート」

「教育実習日誌」

教職特講

「教員採用試験 面接の教科書」

「教員採用試験 論文の教科書」

「面接・論文用学習資料&面接想定質問集～人物を問う質問 編」

「面接・論文用学習資料&面接想定質問集～教育観を問う質問 編」

「面接・論文用学習資料&面接想定質問集～教職教養を問う質問 編」

「各自治体の面接・論文過去問集 最新版」

名古屋編・愛知編・岐阜編・福岡編・静岡編・北海道編 長野編 沖縄編

「個人面接相互評価表」「集団討論相互評価表」「場面指導相互評価表」「小論文相互評価表」



## ○自己評価

学生の思考・感情を揺さぶり、学生の頭の中を「アクティブに」することを心がけてきた。授業評価アンケートや毎回授業で記述させた感想などから、ほぼ達成ができたのでは、と感じている。スライドが速い、時間が足りない、という評価はしっかりと受け止めたいが、裏を返せば「もっとしっかりと学びたい」という学生の意欲の現われとも捉えられるので、喜ばしい批判だとも言える。大学が実施する授業評価アンケートは一部の授業に限られるが、今後とも自主的に授業評価アンケートを実施し、PDCAによる授業改善に努めたい。

国語科教育法の授業では、スタート時期の2～3回はほとんど全員が介護実習のため欠席であることが毎年の課題となっている。全員揃って学べるのは半数回ぐらいで、模擬授業の回数確保に毎年苦慮する。介護実習の日程は学生によって異なるので、来年度も早めに日程を把握し、1回でも多く模擬授業を実施できるようにしていきたい。

## Ⅱ 研究活動

### ○研究課題

「国語の授業で『この授業でどんなことばの力をつけるのか』を、学習指導要領を読みこなしつつどのように明確にするか。また、そのための指導案作成をどのように段階的に指導するか。」

### ○目標・計画

**【目標】**○学生自身が、教師として社会人として必要な国語力を身につけられるようにする。

○学習指導要領に示された国語科の「内容」を踏まえて単元や授業の指導目標を明確化し、学生が指導案作成や授業実践に取組みやすくするための授業内容や教材を工夫する。

小学校では全学年で毎日国語の時間があり、教科の中では一番時間数が多い。最近多くの小学校で教科担任制が導入されているものの、国語の授業に関しては担任が担当するケースがほとんどであり、そこに好悪や得意不得意と言った選り好みは一切通用しない。そこでまず、基礎的な言語事項を復習したり、書く・読む・話すといった実際の言語事項を体験したりしながら、国語を教える教師として、そして何より社会人として必要な国語力を再点検させたい。

また、授業力を磨くにあたっては指導案作成が欠かせないが、学生に指導案を作成させると必ずといって良い程グループで話し合わせようとする。確かに「主体的・対話的で深い学び」への志向から対話的な学びの大切さが指摘されてはいるが、何のために何を、どのように話し合わせるのかが曖昧なままの、話し合い活動ありきの内容が多い。いま一度、国語力とは何か、国語科でつけたい資質・能力、国語科における「見方・考え方」とは何かを見据えた上での「対話的な学び」について研究・工夫していく必要がある。

**【計画】**「国語」「国語科教育」の授業において、以下のような手立てを研究・工夫する

#### ・国語（前期）

建学の精神にある「真に信頼して事を任せうる人格」に必須な国語力を身に付ける、最後の機会が大学での学びである。そこで、日常生活での様々な身近な言語事象を取り上げて考察させ、言葉に関心をもたせ、自身の言語生活を振り返らせることから始めたい。また、言語体験や語彙の乏しい学生が多い現状を踏まえ、語彙がどのように修得されるのかを体験的に学ばせて、自分の語彙を増やすにはどうしたら良いかを考えさせたい。

後半では、後期の国語科教育法の基礎段階として、まず学習指導要領の読み取り方に習熟させる。

そして、文学教材・説明文教材・詩教材・「聞く・話す」教材など様々なジャンルの国語教材を取り上げ、それぞれの教材のねらいを学習指導要領の内容と自力で照合できるようにする手立てや、簡単に作成できる授業構想の形式などを研究・工夫する。

・国語科教育法（後期）

前期「国語」で作成した授業構想を基にして指導案を作成させ、さらにその指導案をもとに模擬授業を実践する。指導案作成の際には、新学習指導要領で求められる国語科で目指す資質能力、「見方・考え方」を、単元や授業の目標にどのように落とし込み、学習活動を設定するか、そしてそれをどのように評価するかを考えさせる。その際、昨年度も効果的だった、全員の指導案の「本時の目標」を羅列して検討する活動を取り入れたい。また指導案をもとにした模擬授業では、全員が授業者となり、めざす資質能力を身に付けさせるにはどのような手立てが有効か検証させる。また、デジタル教科書の操作も体験させ、ICTを活用した授業実践につなげたい。

○2016 年 4 月から 2024 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・西崎有多子 山本かほる『「資質能力目標」明確化による授業改善試案—この授業で何ができるようになるか』東邦学誌第 48 号第 1 号 2019 年

（学会発表）

（特許）

（その他）

- ・山本かほる『初任者研修 研修資料集』2019 年
- ・山本かほる『小学校教員採用試験 面接・小論文対策資料集』2019 年

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

○所属学会

日本国語教育学会

○自己評価

国語科におけるアクティブラーニングのあり方を追究する中で、「活動あつて学びなし」にならないよう、1 時間の授業の中でどんなことばの力をつけたいのか、という国語科における「資質・能力目標」を明確にすることを意識して研究してきた。今年度、その集大成を、「教員養成におけるアクティブ・ラーニング」（共著）の「第 3 章 小学校国語科教育法におけるアクティブ・ラーニング」に、実践例 2 例を挙げてまとめることができた。

昨今、小学校国語科の教科書では、単元の中に「読む・書く・聞く・話す」という言語活動を複数取り入れた単元構成になっているため、「この単元で伸ばしたい言葉の資質・能力は何か」が曖昧になりがちである。そのため、教材と学習指導要領に示された資質能力とが結びつかず、単元あるいは授業の目標設定の際に、授業者が迷いやすく、実際に学生が指導案を作成する時にもこの点で悩むケースが多いようである。この点を考慮し、学生が指導案作成の際に困らないような授業資料や指導案の見本を作る中で、それぞれの単元、あるいは本時でつけたい資質能力は何かを、その都度学習指導要領の記述に立ち返りながら自分自身が考えることができた。今後も、国語科でつけたい資質能力とは何かを考え、教材の特性を活かしながら、単元や授業の目標にどのように落とし込むかを追究していきたい。

### Ⅲ 大学運営

#### ○目標・計画

**【目標】教職をめざす学生を増やすための様々な取組みのさらなる向上をめざして教育学部の将来像につなげ、今後の大学運営に資する**

新1年生のほとんどが、本学教育学部を選んだ動機として1年次からのサービslラーニング実習の魅力を挙げる。特に小学校教師をめざす学生にとって、名東区内の小学校での様々な活動は魅力があるようである。今年度も名東区小中学校長会と一層密接な関係を築き、さらなる連携の強化をめざして学生の活動機会を増やし、本学の伝統であるサービslラーニングの充実を目指して大学運営に貢献していきたい。

また、教員採用試験対策特別講座により、教職を真剣にめざす学生を徹底的にサポートするのも本学の強みとなっている。その強みを積極的に発信して教職をめざす高校生の心をつかむ方策を考え、教育学部の将来像につなげていきたい。

**【計画】学校現場のニーズをふまえた計画**

名古屋市立小学校で教職についていた経験や人脈をもとに、名東区小中学校長会長である本郷小学校鵜飼校長と緊密な連携をとりつつ、順次各校を訪問して本学の取組みへの理解を得ることとする。訪問においては、各校長との懇談から学校現場の行事予定やニーズを把握した上で、連携強化の協力を要請したい。また、昨年度まで派遣していなかった小学校にも働きかけ、学生の活動の幅をもっと広げることも目標としたい。

教員採用試験対策特別講座についても、実務家教員として現場の最新情報を取り入れた内容を計画し、本学を卒業して現場に立つ学生が、より高い教師力を発揮できるようにし、本学のブランド価値向上の一端を担いたいと考えている。

#### ○学内委員等

教職支援センター運営委員会、幼小課程委員会（副委員長）サービslラーニング運営委員会

#### ○自己評価

教職支援センター運営委員として、教職支援センターと教育学部との円滑な連携に尽力してきた。また、実習に向けたさまざまな条件整備や、教員採用試験合格者増のための対策に携わることができた。サービslラーニングにおける小学校との連携については、名東区内の小学校数校を訪問し、校長と協議しながら学生の活躍の場を増やすことができた。

教職支援としては、2月に「教職セミナー」を企画し、終日開催で実施した。オリエンテーションで、教員採用試験に向けた心構えや実際の出願手続き、教員採用試験をめぐる動き、願書の書き方をレクチャーした後、愛知県・名古屋市で実際に面接官を経験した元校長数名を外部講師として、志望自治体ごとのグループに分けて個人面接演習、場面指導演習を実施した。今年度は、志望自治体の面接・場面指導の過去問をあらかじめ渡して予習をさせたことが奏功し、例年にもまして充実したセミナーとり、受講学生からの高評価（事後アンケート評価 平均4.9／5点）を得た。

### Ⅳ 社会貢献

#### ○目標・計画

**【目標】地域に対する本学のクレドに基づき、地域との連携・貢献の向上・進化をめざす**

地元の平和が丘小学校に教務主任として数年間勤務し、平和が丘学区連絡協議会と密接に関わった経験や、名古屋市教育委員会で勤務した経験を活かし、人脈のいっそうの開発や地域との連携強化に貢献したい。

【計画】名古屋市、特に名東区内の諸団体・関係機関・市立小学校と積極的に交流し、学生の諸活動への参加が円滑にできるようにする。

サービslラーニングの内容充実を図り、市内小学校、特に区内小学校との連携を図る。特に、名古屋市教育委員会からの最新の通知・情報などを踏まえ、諸活動に参加する学生に、地域の実情や注意点を伝えていき、活動が円滑・効果的に進むよう支援していく。活動に参加させるにあたっては、本学校訓「真面目」を体現させるため、服装・態度・あいさつなど、本学を代表して参加する自覚をもたせるよう、事前指導に力を入れたい。また、サービslラーニングの一環として例年参加している「なごやいきいきサポーター」の活動についても、学生向け説明会にオブザーバーで出席して教育委員会担当者の話を直接聞き、市教委と密接に連携しつつ、積極的に関わっていききたい。

これらの努力により、本学のブランド価値向上の一端を担いたいと考えている。

#### ○学会活動等

1月27日（土）日本国語教育学会 愛知（名古屋）集会 於ウインクあいち 参加・指導助言

#### ○地域連携・社会貢献等

サービslラーニングにおける名東区内小学校へのボランティア派遣・名古屋市教育委員会事業の「名古屋市土曜学習いきいきサポーター」のとりまとめ役として、各学校・教育委員会との交渉・調整にあたり、以下の行事に学生ボランティアを派遣した。

前期

5月 運動会準備

猪子石小学校 本郷小学校・極楽小学校 平和が丘小学校 香流小学校 猪高小学校

後期

10月 学習発表会・作品展運営補助

猪子石小学校 香流小学校 猪高小学校

通年 名古屋市土曜学習いきいきサポーター

平子小学校 白沢小学校 岩塚小学校 東丘小学校 なごや小学校 砂田橋小学校  
長須賀小学校 春岡小学校 港楽小学校 野並小学校 藤が丘小学校 平和小学校  
大宝小学校 西築地小学校 八熊小学校 川中小学校 清水小学校 当知小学校  
自由が丘小学校 山田小学校 植田南小学校 楠小学校

#### ○自己評価

名東区内小学校へのボランティア派遣については、4月当初に名東区校長会会長（本郷小学校 鵜飼克博校長）を訪問してサービslラーニングについてのご理解を得て、区内小中学校の行事予定を知ることができたため、交渉を円滑に進めることができた。各学校の担当教員を決めて学生の事前指導を数回に分けて念入りに行い、当日も担当教員が手分けして現地に出向いて指導した。中でも香流小学校の杉山靖校長先生は本学学生の受入れに積極的で、3月8日（金）の「地域の方に感謝する会」に学生（ボランティア派遣した学生のうち香流小の卒業生2名）を招いて下さった。

昨年度から担当することになった「名古屋市土曜学習いきいきサポーター」のとりまとめについては、名古屋市教育委員会指導室の担当指導主事と連携を図り、学生向け活動説明会にも出席して、昨年よりも多くの学生を派遣することができた。

## V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

### 1 アクティブラーニングについて

今年度は、国語や国語科教育法の授業で進めてきたアクティブ・ラーニングの成果について、共著「教員養成におけるアクティブ・ラーニングの実践研究」にまとめることができた。

拙稿の中では、国語や国語科教育法の授業で進めてきたアクティブラーニングにおいて、ありがちな「活動あって学びなし」を回避するために必要な、基本的な考え方を述べた。またそれをどのように具現化していくか、について2つの実践例を挙げた。国語科教育法では、グループごとに模擬授業を行い、全員に授業者を経験させたが、その際、アクティブな中にも、「その授業でどんな言葉の力をつけるのか」を「資質・能力目標」とし、無目的な活動にならないように指導してきた。

また、同書には取り上げなかった教職概論の授業でも、新聞記事や教育雑誌などから最新の情報や時事的な問題を取り入れ、さまざまな教育課題を「自分ごと」として考えさせることで、思考をアクティブにしていっていった。

### 2 教員養成・教師教育について

校長職を退職後、2年間初任者研修の指導教員を務めながら、若手教員の悩みや喜びと向き合ってきた。その後本学に実務家教員として奉職してはや4年になる。39年にわたる学校現場や教育委員会での実務経験を買って頂いてのことだと自負するとともに、ありがたいことだと受け止めているが、自分の経験を語るだけでは、変化の激しいこれからの社会に出て行って教員になる学生にとっては、古い情報になってしまう。教育を取り巻く情勢変化が年々激化する中で大学教員として教員養成の一端を担わせて頂くからには、常に最新の情報や知見にあたってこれらの問題を体系化し、学生により効果的に伝えていけるよう、今後も研究・研鑽を積んでいきたい。また、昨今の「ブラック職場」言説による教員志望者の減少をふまえ、本学教育学部の魅力をどう発信していくか、考え、オープンキャンパスの内容改善や入試広報課とのさらなる連携を実践していきたい。

### 3 愛知教育大学「子どもまんなかシンポジウム」について

愛知教育大学野田学長の要請をいただき、12月23日（土）「子どもまんなかシンポジウム」のパネリストとして、豊田市教育委員会教育長山本浩司氏、愛知教育大学附属高等学校長西牟田哲哉氏、名古屋市教育委員会教育委員山本久美氏とともに参加する機会を得た。「子どもを中心に」と長らく言われながらも、子どもの意見を真剣に聞いていたかという反省をもとに、前半の中高生・大学生のグループディスカッションの結果を受けてのパネルディスカッションだった。不登校や校則問題などが取り上げられたが、自分からは教師が「良かれ」と思うあまり結果的に子どもの気持ちに寄り添えない対応をしていることが多いのではないか、と提言し、議論を深めることができた。

## VI 総括

教員採用試験の早期化・およびそれに伴う教育実習の早期化など、対応が必要な課題が多い1年だったが、多くの教職員の皆様の温かなご指導・ご高配を得て、ここまで過ごすことができた。

しかしながら、目の前には教育学部の志願者の伸び悩みという厳しい現実がある。学部の将来像をどうするか、実務家教員として学校現場の情報や全国的な動向を敏感にキャッチし、それらを踏まえて学部の先生方・大学スタッフの方々とともに考えていかなければならないと痛感している。